

今年MLBエンジェルスの大谷選手が本格派二刀流の大活躍を見せ、連日、様々なニュースが飛び交っている。その中で、大谷選手の高校時代にコーチングの一環として書かれた一枚の目標達成シートが紹介され、注目された。それは曼荼羅構造になっており、長方形の紙が3×3=9個の大マスに分割されている。高校一年生時代の大谷は、中央の大マスを更に3×3に分割した真ん中の小マスに「プロ8球団からドラフト一位指名を受ける」という大目標を書き、その大目標を実現するための8つの中目標としては、「体づくり」、「コントロール」、

ばないもの、すなわち、コントロールできないものと考えがちだが、アカデミックな世界では、運はある程度コントロールできるという考え方があるらしい。例えば、「運のいい人の法則」（角川文庫、R. ワイズマン）では、人々の運の良し悪しと行動特性の関係がまとめられている。著者の心理学者の主張を要約すれば、「運が良い人は、良い情報が到来しそうな場所にポジショニングして良い情報に出くわす機会を増やし、また、不運な出来事があってもポジティブな面を見つけて幸運に転換することができる」ということである。大谷が運を味方に

## 数 | 理 | の | 窓

### 運を味方に付ける テクニック？



「キレ」、「スピード」、「変化球」といった体力面や技術面の目標と、「メンタル」、「人間性」といった精神面の目標、そして「運」を書いている。

注目したいのは、大目標達成に向けて運を味方に付けることを意識している事実に加え、その実現のために、「挨拶」、「ゴミ拾い」、「部屋の掃除」、「審判への態度」、「道具を大切に扱う」というような道徳の実践や、「応援される人になる」、「プラス思考」、「本を読む」といった項目が並んでいることである。運を味方に付けるためには、道徳的であることも含めて、社会とポジティブに関わる姿勢や社会でのポジショニングが重要であると直感しているのだろう。

「運」というのは通常は偶然の産物であり、人智が及

づけるために道徳的かつプラス思考であろうとすることの妥当性をまさに裏付けていると言える。

運とか偶発的に発生する事象に対してどう向き合うかということは、ビジネスにおいてイノベーションをいかにマネジメントするべきかを考える上で参考になる。イノベーションも本質的にはアイデアがぶつかり合って偶発的にビジネス機会が広がる現象であり、そこには常に「良い運」が存在するからである。また、同時に、イノベーションは自然と発生するようなものではなくて、常に創発が起こる場所にポジショニングする努力が必要だということでもある。個人が良い運を引き込むことと、企業のイノベーションの背後には、ほとんど同じ原理が存在しているように見える。 (小粥 泰樹)